●１１月選評

小島なお

・にしざわゆうと（福井県）

冬が立つカレンダーより厚い紙

冬が立つのが立冬。もし本当に冬が地上に聳え立ったなら。白くて、張りのある硬さで、筒状で。冬という建築物は誰も覗けないし、入ることができない。

・道標モニカ（愛媛県）

肺に映る揺れる青のペイズリー柄
君と初めてのおそろい

時計や靴や、ましてや指輪なんかではない。同じ空気を吸うような、身体の内側に蔦を這わせるような、生の根源に潜るようなおそろいでありたい。

・余剰な卵（福島県）

ヴィンセント・ゴッホの
君の言うヴィがくどくて
逃げろ冬

ゴッホの名前をヴィンセントから言うひともめずらしい。そんな君はたぶんちゃんと「ビ」ではなく「ヴィ」と発音する。正しさからはときに逃走していい。

・桜庭　紀子（和歌山県）

祈る泣くそのリピートに
飽き出して
やっと白紙のページをひらく

人類史がはじまって以来、確認できるだけでも人は泣くことと祈ることを数千年繰り返している。泣かない、祈らない歴史物語を書き得るのは誰か。

・藤井　柊太（神奈川県）

夏のことおもいだせない
わたしたち
存在しないテニスサークル

四季のなかでもとくに夏はだめだ。思い出せないことは、存在しないことになるのだろうか。あの試合も合宿もめくるめく夏に幽閉されたまま。

・平山（東京都）

iPhoneとつくねと
白い電球と
毛布から出た足が見てた死

画面のなかの死だろうか。部屋の主は毛布のなかで眠っている様子で、目のないものたちがその死に立ち会うしかなかった。翌朝には跡形もない死。

・ツマモヨコ（兵庫県）

花束を包装紙ごと抱く音が
隣の部屋からうるさかった

隣の部屋は見えないはずなのに、その音が何の音かわかる。花束の包装紙だけがひびかせる音がたしかにある。壁一枚を隔てた花束のこちらとあちらの価値。

・結城熊雄（東京都）

干からびた洗濯機さえそのままで

祖父母の家は白を深める

生きていなければ服を着ないから洗濯をする必要はない。生きていなければ暮らさないから片付ける必要はない。そのように喪失の確信を家は深めてゆく。

・三矢フミ（東京都）

あなたたち
ではない　わたし
渋谷の雑踏にのみ降りしきる恩寵

あなたたちという言葉はヒエラルキーの言葉である。学校や社会、規律や統制がある場が発する声である。恩寵は雪のように、他者と他者にのみ降り積む。

・穴棍蛇にひき（東京都）

兄であることをやめたら
もみの木の下で会おうよ
電飾になろうよ

年長者である血の約束から解かれたら。兄も姉も妹も弟もみな一本の樅を光らせて、聖夜そのものになれたら。これからは点滅を言葉の代わりに。